

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

川口裕司



学位申請者： 時田 朋子

学位論文名： 同時バイリンガルの言語使用

－日本語と英語を話すカナダの子どもたちの場合－

【審査結果】

博士論文審査委員会は、提出された時田朋子氏の学位請求論文を慎重に審査し、最終試験（公開審査）を行った結果、全員一致で学位申請者に博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。

【論文の概要】

審査対象論文は、第1章から第5章および第6章の結論で構成される。以下に論文の概要を記す。

第1章は「問題提起」と題し、博士論文の背景について説明している。国際結婚や異民族間結婚の増加によって、両親はそれぞれの母語を子供に習得させようと考えて、家庭内で2つの異なる言語を用いる。その結果、世界中で「同時バイリンガル」の子供たちが増えている。従来の子供のバイリンガリズム研究は、第一言語習得期である2歳から4歳児を中心にして研究され、学齢期の子供を対象にした研究はほとんどない。これに対して時田氏の研究は、学齢期前後の同時バイリンガルの子供の言語使用を対象にしており、一人の子供が2つの言語を切り替えて使用する、所謂コードスイッチングの現象について、言語学、社会言語学、マイノリティ言語の発達という3つの異なる観点から分析を行っている。

第2章は「調査方法」を説明している。被験者たちは、4家庭6名の就学前後の子供である。彼らの言語社会的背景はある程度まで共通している。彼らは全員バンクーバーで生まれ育ち、英語と日本語の同時バイリンガルである。父親はカナダ人の英語母語話者で、母親は日本人で日本語を母語とする。時田氏の言語データは、これらの家庭の食卓における自然会話を録音し、それを文字転写したものであり、各家庭のデータは1.5時間程度であった。

第3章は「文内コードスイッチング：生成の原因解明に向けて」と題して、同時バイリンガルの子供たちが行うコードスイッチングを言語学的観点から分析する。子供たちは、一つの文の中で二つの異なる言語が出現する「文内コードスイッチング」を頻繁に行う。まず時田氏は、代表的な理論である Poplack (1980) の「等価制約」を検討し、それを批判し

つつ提示された Joshi (1985) の新たな枠組みについて議論する。Joshi によると、コードスイッチングでは、文のフレームを構成する「基盤言語 (ML)」と、そこに埋め込まれる「埋込言語 (EL)」が区別され、文中における二つの言語の役割は異なる。この枠組みを Myers-Scotton (1992) はさらに精緻化し、「基盤言語フレームモデル」を提唱した。時田氏の分析は主に Myers-Scotton のモデルに基づいている。このモデルでは、ML が文の語順を決定する。また EL は一つの形態素だけからなるタイプと、複数の形態素からなる「EL の島」に下位区分される。以上の先行理論を批判的に解説した後に、時田氏はこれまでの研究は主としてコードスイッチングの単位を定義することが中心であって、なぜ文内コードスイッチングが起こるかという研究がなされていないと指摘する。そして本研究では文内コードスイッチングの生成メカニズムについても考察している。

データを分析した結果、学齢期前後の子供たちの文内コードスイッチングには幾つの特徴が見られた。①コードスイッチングの9割は「MLが日本語・ELが英語」であり、②ELの方がELの島より数が多く、③ELとELの島は主に名詞や名詞句であった。時田氏はこれらの観察をもとに、学齢期前後の同時バイリンガルの子供たちにみられるコードスイッチングは、ELとだけ結びついた語彙がMLで構築される文の表層に出現する形で起きていると指摘する。

第4章の「ストラテジーとしてのコードスイッチング」では、コードスイッチングを社会言語学的観点から分析する。先行研究では、バイリンガルは発話外的要因に応じてコードスイッチングを行い(Fishman, 1965), 特に「聞き手」が要因となる(Yamamoto, 2001)とされる。時田氏は、先行研究は学齢期前後の子供の発話を分析しておらず、「聞き手」以外の発話外的要因、たとえば会話機能や発話内的要因についても検討する必要があると指摘する。

データ分析の結果、まず発話外的要因として、「聞き手」だけでなく、「会話参加者」を意識しながら子供たちがコードスイッチングを行っていることがわかった。さらに発話内的要因として、「会話文脈の一貫性の維持」や「会話機能の強化」がコードスイッチングの要因として指摘された。「会話文脈の一貫性の維持」とは、具体的には、①直前の相手の発話を繰り返したり、②別の言語を用いて介入する第三者に対応したり、③使用している言語で表現できない語彙や表現を補完したり、④相手からの指示に対応することを意味する。

「会話機能の強化」には二つの大きなタイプがある。第一のタイプは、相手に働きかけを行うもので、「聞き手に依頼する」、「聞き手の関心を引く」、「聞き手に期待する」等の機能に伴ってコードスイッチングが起きる。第二のタイプは、相手への応対をするもので、「同意する」、「主張する」、「否定する」等の機能に伴ってコードスイッチングが起きる。時田氏はこうしたコードスイッチングの言語的方向性は「アコモデーション(Giles et al., 1977)」の現象として解釈可能であるとする。すなわち、相手と同じ言語へのコードスイッチングは相手への「収束」を、相手と異なる言語へのコードスイッチングは相手からの「拡散」を強める。このように同時バイリンガルの子供たちは、より良いコミュニケーションを構

築するために、二つの言語能力をアコモデーションのストラテジーとして使い分けているのである。

第5章は「家族の言語使用パターンがコードスイッチングに及ぼす影響」と題されている。一般に、それぞれの親がそれぞれの母語で子供に話すやり方を、「1親1言語 (One Parent – One Language, OPOL)」アプローチと呼ぶ。先行研究では、子供がマイノリティ言語（バンクーバーにおける日本語）を使用するためには、マイノリティ言語を話す親ができる限り子どもにマイノリティ言語で話しかけ、その言語を使用する環境を作り出すことが重要であると指摘されてきた。とはいえ先行研究は子供のコミュニケーション活動を包括的に分析してきたわけではない。そこで時田氏は、家族間のコミュニケーション活動がいかにか子供のマイノリティ言語の使用に影響を与えるかを分析したのである。

日本語の使用状況および就学状況に基づいて6名を3グループに分けて分析した。すべての親はOPOLを実践しており、親からの直接的な日本語の受容は同じであるのに、両親間で日本語を使用する家庭の子どもの方が日本語の使用頻度は高かった。他方、母親は子供に日本語を使用させようと工夫していたが、それは直接的にマイノリティ言語の使用に影響を与えていなかった。このことから学齢期の子供たちの場合、OPOLのみでは不十分であり、家庭の中でできるだけマイノリティ言語に接触させることがマイノリティ言語の使用にとって必要であることが示唆された。

最後の第6章では「結論」が述べられている。本論文を通して、学齢期前後の同時バイリンガルの子供たちは、様々な発話外的制約、発話内的制約、言語学的制約を受けながら、二つの言語能力を用いていることが明らかになった。本研究を土台にして同時バイリンガルの言語能力に関する理論モデルに繋げていくためには、今後、学齢期以後、すなわち「思春期」の読み書き能力を含む言語使用を分析する必要があると締めくくっている。

【論文の評価】

公開審査は2010年1月15日（金）に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所3階301セミナー室において実施された。まず最初にパワーポイントを用いて博士論文の目的と概要の説明が20分程度あった。その後、各審査員から質問がなされ、それに対して時田氏から応答があった。以下、本論文の全体的な評価について述べる。

1. 問題設定

まず第一に指摘すべきことは、カナダにおける同時バイリンガルの子供の言語使用を研究している研究者は日本では数えるほどしかない。また時田氏も指摘するように、先行研究は学齢期前の同時バイリンガルの子供に関する研究が一般的であった。本論文において時田氏は、「母親が日本人でありOPOLを実践する家庭における学齢期前後の子供たち」を対象とすることで、分析に関与するパラメータを制限し、かつ統制されたデータに基づいた分析を行うことができた。同時バイリンガルの子供に関する研究の現状を考えると、とくに学齢期の子供のコードスイッチングに問題設定をしたことで、本論文は従来の研究

を補完する重要な事例研究になっている。また、食卓で録音したデータを、全て文字転写してコーパス化することで、分析データの可視化を図り、他の研究者にも同コーパスのコードスイッチングを様々な観点から分析できるようにした。こうした分析の再現性を可能にした点も重要な貢献であったと言えよう。

2. 研究手法

第1章で述べられているように、本論文はコードスイッチングを、言語学、社会言語学、マイノリティ言語の発達という3つの異なる観点から分析している。従来の研究の多くはこれらの観定のいずれかに焦点を当てて分析がなされてきた。時田氏はそれに対して、より包括的な視点からコードスイッチングを研究しようと努めた。もちろん一人の若手研究者が3つの観点からコードスイッチングの現象を研究することは容易なことではないのだが、時田氏は果敢にそれに挑んでいる。とくに第3章と第4章では、言語学および社会言語学の先行文献を広く渉猟し、Myers-Scotton や Yamamoto らによる研究の現状を踏まえつつ分析を行っており、その点は高く評価できる。

3. 新しい知見

本論文の研究成果として最も重要なのは、バンクーバーに住む学齡期前後の同時バイリンガルの子供たちにみられるコードスイッチングを臨地録音によって実証的に記述したことである。時田氏が観察できた事実、MLが日本語でELが英語というパターンが全体の9割を占め、ELとELの島は主として名詞・名詞句であったことは、本論文が明らかにした事実である。また「聞き手」以外の、たとえば会話参加者や会話機能などの要因もコードスイッチングの引き金になる場合があることも、本分析において新たに明確になった。さらにOPOLだけではマイノリティ言語を十分に維持することが難しく、家庭内でできるだけマイノリティ言語に接触させる必要があることも時田氏が分析の中から推論した新たな知見と言えよう。

ところで、以上の肯定的な評価以外に、若干ではあるが批判的コメントが委員から述べられた。たとえば、①統計処理を行うことで、有意味な現象かどうかを判断したほうが良いような例があった、②コンテキストやストラテジーといった用語の定義が必ずしも十分とは言えなかった、③コードスイッチングという現象を言語学、談話分析、社会言語学といった異なるアプローチを用いて分析したことは評価できるものの、個々の議論に深まりが欠けているような印象を持った、④様々なアプローチから浮かび上がってくる事実を、全体として有機的に繋げて一つの理論モデルにまで昇華させると良かった、などである。こうした批判は、もちろん時田氏の研究の新奇性とデータの稀少性を十二分に理解したうえで、さらに精緻な学術論文を目指す上でのアドバイスとして述べられたものであり、時田氏の論文に対する評価を些かも低めるものではない。

最後に審査委員会の最終的な評価について述べる。本学位請求論文は、先行研究の渉獵を行い、妥当な研究手法を用いており、質・量ともに課程博士論文の水準に達している。時田氏はまた、自立した研究者として研究を行っていくことができる資質を備えているというのが審査員の一致した見解であった。公開審査においても、時田氏は審査委員の質問に対して適切に応答することができた。時田氏の研究のさらなる進展に期待しつつ、審査委員会は全員一致で博士（学術）の学位を授与するのが適当であると判断した。